実践レポート

子どもが輝き、地域を活性化する総合的な学習の取組
～ 地域人材との関わり合いと「～したい」が連続する学習活動を核として ～

三豊市立二ノ宮小学校
教諭　　高田　美紀

1　はじめに

本校はお茶の名産地である農村地区の小規模校で、児童数は年々減少の一途をたどっている。地域は高齢化、人口減少が進み、活性化させる組織作りや行事に力を入れている。「未来の地域を担う人づくり」としての学校教育への期待も大きい。地域の方が、活性化の一環として長年取り組んでくださっている「ふる里体験農業の会」の指導を受けて、４・５・６年生は毎年米作りを行っている。

本学級の児童(5 年生 11 名)も昨年度から参加したが、実際に体験したのは、田植えと稲刈りだけで、世話の仕方や成長の様子については、ほとんど知らず、お世話をしてくださった方に感謝の思いをもっている児童も少ないのが実状であった。また、素直で穏やかな児童たちだが、自ら課題を見つけて進んで解決したり、発言したりすることには消極的で、地域の課題に対しても、それを自分たちの問題としては捉えておらず、自分に何かできるとも考えていない。

これらの課題から、校内に小さな田んぼを作ることにした。自分たちで栽培することで、様々な疑問や問題が生まれ、主体的に解決しようとする体験ができる。また、「ふる里体験農業の会」から４人の方に５年生専属の師匠として継続的に関わっていただくことで、地域の方とのつながりを深め、米作りに対する思いや知恵の素晴らしさを感じることができるだろう。そして、自分に対する自信と地域への誇りをもつことができるだろうと考えた。

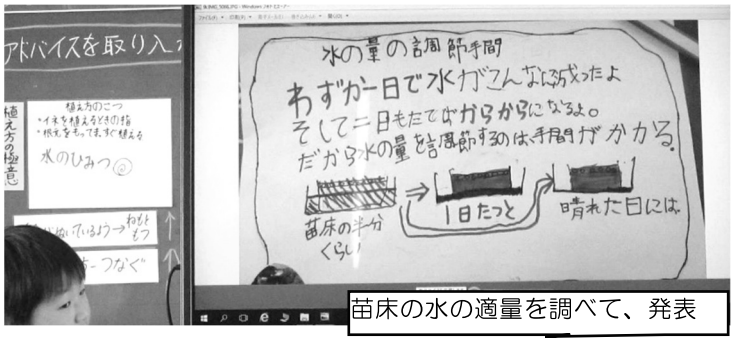
2　実践の内容・方法

（1）学びの必要感を高める　―『～したい』を連続させるための具体的な取り組み　―

①　自分でお米を作りたい

自分の手で作りたい！という願いを実現するために、様々な準備を自分たちでするとともに、育て方を調べる必要が生まれた。本やインターネット、米作りのパンフレット、社会科の教科書などの資料を集めて、米の育て方を調べた。しかし、手作業でとなると同じ方法が通用しない。師匠に相談しながら、１つずつ工夫して取り組んでいった。

育苗ー毎日観察・管理



苗床の水の適量を調べて、発表

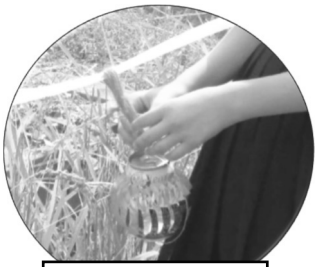
育苗の際は、毎日の観察や師匠のアドバイスから、気温や水の量の調整が大切なことに気付き、毎日見守り管理をすることができた。また、発芽した苗の美しさに感動し、１日で約１㎝も伸びる稲の力強さも知った。

ぐんぐん伸びる苗

次は、学校のどこに、どんな土で田植えをするのかが問題になった。昨年の経験から、「水を貯められる」「毎日自分たちで世話ができる」ことに着目し、発泡スチロールの箱で一人一つのミニ田んぼに取り組むことにした。

自ら準備し世話をすることで、活動の見通しが立ち、次々に新たな疑問や課題が生まれ、友だちと意見を交わして解決したり、自分から田植え用に箱を探して持ってきたりするようになってきた。

８月初旬には小さな花が咲いた。昨年は、稲の花に気付いてもいなかったため「稲に花は咲くのか」は、大きな疑問だった。夏休みの登校日、実が膨らみ始めたが鳥が食べていることに気付き、さっそく鳥の脅しを自作した児童もいた。


手作りの鳥おどし

② 自分たちで育てたお米を炊いて食べたい

９月上旬、師匠のサポートで、無事稲刈りができた。刈った稲は、子どもたちのアイデアで、ハゼがけがわりに庭のフェンスに掛けて乾かすことにした。

実り具合を確かめる

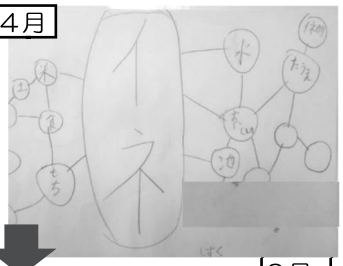
もみすり

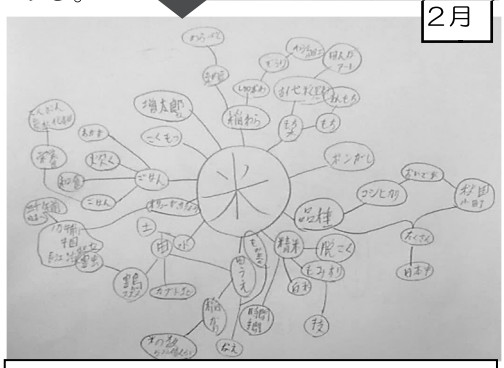
「先生、はよ食べよ！」という児童に、「精米せんかったら、食べられんやろ。」という声が上がった。そこで、なんとしても精米して白米にしたいという課題が生まれた。様々な手段で、手作業で脱穀・もみすり・精米をする方法を調べ、情報を交換し合って根気よく取り組んだ。

③ 成長に気付き、新たな「～たい」が生まれる振り返り活動

これまでも、活動の計画をする際には、ウェビングマップを活用してきた。児童の知識や興味の方向を把握するとともに、児童自身は、活動の見通しをもつことができ、クラスで出し合うことで活動に広がりが生まれるからである。

今回の実践では、活動の節目でも繰返しウェビングマップを書いた。そうすることで、ものの見方や知識の広がり、自分自身の成長にも気付くことができた。



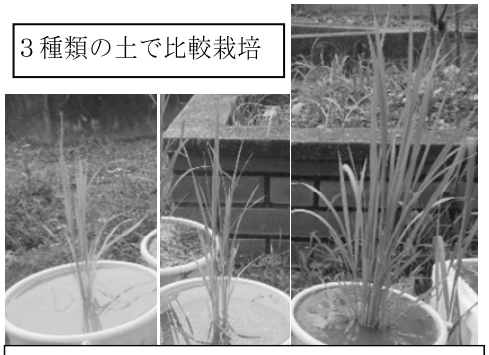


見方・考え方の広がりがわかるウェビングマップ

【児童の振り返り】最初は、お米は食べるものしか想像できなかったけど、今は、稲刈りから白米にするまでの作業はもちろん、お米の歴史や稲わらがどんなところで使われているかを興味をもって見たりして、わたし自身も成長できたので、師匠さんや地域の方には、感謝をしています。

（２）学びを深める　―　師匠から、経験、知恵、生き方を学ぶ　―

師匠たちは、個々に籾撒きができるような育苗箱を準備してくださったり、稲への思いを語ってくださったりした。細かい計算をして肥料を加減していることや、温度管理、作業時期の決め方にも長年の経験と知恵が詰まっていることも学んだ。「（稲は）してやっただけ、応えてくれますからな。」という言葉通り、毎日のようにミニ田んぼを見守り、自分たちの困りごとに、的確に応えてくださる師匠たちに、児童たちは、全幅の信頼を置き、何でも相談するようになった。師匠がいないときにも、「～さんが教えてくれた田植えの仕方は・・」と、学んだことを積極的に生かそうとする姿が見られた。



土について相談すると、師匠の田んぼの土を分けていただけることになった。しかし、「他の土でも育つのではないか」という疑問も生まれ、砂場、運動場、師匠の土の３種類で比較栽培した。師匠の土は肥料をやらなくても、濃い緑色で大きく育ち、他の２つは色も薄く茎も細く、分けつも少なかったことから、栄養のある土で育てる大切さを実感した。

（３）学びを広げる　―　他学年、そして地域へ　―

①　下級生に学びを伝える

活動には夢中で取り組むが、学んだことをまとめたり伝えたりするのが苦手な児童に、下級生に稲の秘密や田植えのコツを伝える場を設定し、学びを再構成し分かりやすく伝える活動を行った。来年から学校田での稲作に参加する３年生には、内容を精選し田植えの仕方を工夫して紹介した。また、今年から田植えに参加する４年生には、自分たちが籾から育てた苗を大事に扱ってほしいという切実な願いを伝えた。

② 地域への思いをこめて、創作劇で問題提起

社会科で日本の食糧自給率が低いことを知って問題を感じたことから、地域の一大イベントである文化祭で、自分たちの米作りに関係付けて、より多くの人に問題提起をしたいという思いが生まれた。稲の種類や歴史等、調べたことも加えてプレゼンテーションやクイズを取り入れ、師匠をモデルにした人物も登場させた創作劇を発表した。当日は師匠だけでなく地域の方々から賛同の声や拍手が上がり、発表後も、感想や励ましの言葉をたくさんいただくことができた。

創作劇で問題提起

【学校評価委員の意見】地域や保護者に訴える工夫や内容で、大変素晴らしく感動したという声をたくさん聞いた。地域の現状を知って、児童なりによりよくしていこうとする価値ある取組だと感じた。

3 実践の成果

感謝・大試食会

２月の「感謝・大試食会」に招待した師匠から「いろいろな学校でバケツ稲を手伝ってきたが、精米まで手作業でやりとげて食べられたのは初めてだ。ほんとにすごい。」と褒められ、どの子も誇らしげだった。これまで、自信をもてず受け身であることが多かった児童たちが、「またお米育てたいな。」「６年の総合ではもっと地域を盛り上げたいな。」等の願いを語る姿が見られるようになった。自分自身に自信が生まれるとともに、地域の方を信頼し、これまで以上に自分たちの地域に自信と誇りをもつことができた。

県の学習状況調査のアンケートでは、以下の項目で取組の成果がみられた。

○今住んでいる地域の歴史や自然に関心がある。	本校	54.5%	県	29.9%
○自分たちで課題を立て、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して発表する学習活動に取り組んでいる。	本校	45.5%	県	34.4%
○将来の夢や目標をもっている。	本校	63.6%	県	48.2%

4 普及させたい取組と期待される効果

少子化が進む昨今、本校と同様の課題をもつ学校も多いと思われる。本校は、これまでも地域との交流は盛んだったが、もう一歩踏み込み、児童の願いや課題を伝えて共有し、継続的に関わっていただいたことで、関わり合いも学びも深まった。また、様々なものを総合学習のテーマで有機的に関連付けて学びを広げ、追究し発信することで、地域に影響を与えられることを実感できる生きた学びとなった。「～したい」という児童の思いを大切に、地域との価値ある関わり合いを取り入れることで、自信をもち自ら課題に向かっていく児童が育つと考えられる。

5 課題及び今後の取り組みの方向

地域人材の活用を１年単位で終わらせず、学校全体で共有することが必要だと考える。そのために、次学年に引き継ぐとともに、校内研修等を活用して各学年の活動や地域人材についての情報を職員間で共有し、人材バンク等にも記録を残しておくことが大切であろう。

また、児童の活動も１年で途切れ、他学年に広がらないことがある。活動を通して得たものや残された課題、願いなどを、次の学年に伝える交流活動を年間計画に位置付けることで、次の学年も課題意識をもって臨むことができ、さらに深い地域学習につながると考える。